旅に想う（１）

──西ドイツの旅──

小池飛雁

# 【目次】

●エーリカ　●月沈原　　●聖餐論の古戦場　●ホフマン教授　●アイテル牧師　●フラントフルト　●棕櫚の植物園　●カンパニアのゲーテ像　●サムソンとデリラ　●デイールスベルク古城址　●ハイデルベルク　●バード・ウィンプフェンの修道院　●シュトットガルト市　●マールバッハ　●ノイ・ウルムのグンデルト博士

**１９６１年８月７日（月）**

# ●エーリカ

去年の八月、三週間で西ドイツを８字形に、スイスを６字形に、汽車旅行をしてみた。あまり天候に恵まれず、気温もしばしば高く、旅行者は多く、ホテルは満員の盛況で、そういう点ではむしろ感心できない旅であった。しかし、休暇中なので、知人、友人の好意にあずかったり、時には不図めぐりあうなどのこともあり、この点では幸であった。

五月から三ヵ月間ハンブルク大学で夏学期を日本語の講師としてつとめたあとの休暇を利しての旅で、多少名の知れた都市をのぞいてみようと思ったわけである。思い出ずるままにその印象、所感をつづって見よう。旅の道すじに従った方が楽であるから、そうさせていただこう。

ハンブルクの中央停車場というのは、煤煙でくすぶった大きな蒲鉾型の屋根を冠っている。日本の駅や汽車の方が明るくあかぬけしている感じである。車内の網棚は二段になっていて、上段の方が大きく、大トランクものせられるようになっている。私は小さな肩かけカバンと手提カバンと写真機一つという簡単な旅装であるが、男も女も大きなトランクを提げて車内にもちこむ旅の仕方に、まず驚いた。チッキもあるにはあるが、大抵は何でも自分でやるという逞しいドイツ気質の一つのあらわれである。肩かけカバンは殆どドイツでは見かけない品で、時折珍らしそうにこちらが見物された。網棚といっても、そんなやさしい感じの網などはない。皆鉄製である。ドアも重々しいドアで、音もすさまじい。とにかく鉄の音に快感を覚える国民である。都電、国鉄電車に相当する車両でもみなその通り。ていさいのいい音などではない。ハッキリと大きな音をたててしまる。

やがて急行列車（デー・ツーク）は有名なリューネブルゲル・ハイデの中を走る。のやわらかなエーリカの緑に心をなぐさめられた。ハンブルクはエレガントな大都会だから、私の眼は田園風景にあこがれていたのである。

旅人のわびしき胸をやわらげしリューネブルクのエーリカの波

# ●月沈原

そのうちにドイツ最古の劇場（１６８５年）がのこっているといわれるツェレの市を過ぎ、人ロ５０万のハノーヴァーにつく。ドイツ工業市場として有名な市で、妙な塔がそびえていた。更に南下してゲッティンゲン（月沈原）に着いたのは丁度正午であった。水戸高校（旧制）時代に、字引をひきひき、むずかしい本だなあとうめきなから、しかしなかなか面白くよんだ詩人ハイネの「ハルツ紀行」で知ったなつかしい名の市である。ところがあいにく時刻の関係で博物館も何も見物できなかった。ドイツは曜日及び時間がいろいろ限られていて、旅人はその辺に気をくばって予定をくまないと折角たずねても門前ばらいをくらってしまう。しかしドイツの時限的な、無駄の少ない生活には学ぶべきものがある。万人平等の権利で休むときには休むといった合理的民主的精紳らしい。それは結構だが、多少の融通性をもって便宜をはかるように、更に高度の民主性を旅人としては要求したい。外国人たる旅人には一生一回かぎりの訪問である。数分のくいちがいのことなら見せてあげましょう、といった同情も融通もない。時計の針に権威があるといった顔つきで、あまりあてにならぬ時計を指さされたのではそっけなさに話合いの気もくじかれてしまう。理づめと規則と証文ばかりが能ではなかろう。日本人はまた逆に融通がききすぎて弊害が生じないとは言えないけれども。そういう点は日独はやはり国民性が東と西だけちがうところがあると言っていいのだろう。歴史は６００年を経た古色蒼然たる市役所の有名な広間をみた。小さなものだが、そこに描かれてある画が昔の市民気質をあらわしているので有名なわけである。また各都市の盾形の紋章（ワッペン）が描かれてあった。楽人がギター風の楽器をかつぎ、孔雀の羽を帽子にかざし、水筒を腰にさげて微笑みながら歩いているすがたが目にのこっている。そこに＜Ubi bene ibi patria＞と書いてあった。「楽しむところに祖国あり」という意だろうが、今の世界感覚からいえば、祖国意識の過剰は禁物で、国際友好が重大問題であるから、「楽しむところに世界あり」（Ubi bene ibi mundus）と言いたいところである。ドイツ音楽が世界の人心を楽しませている功績は大きなものだ。ドイツはしかし悲劇的な国民だ。そういう偉大な世界音楽の主座を占めるものを創造しながら、また世界戦争でも主因をかもし出した国民でもある。ところでベルリン問題が今や世界の癌のようになっている。

この市役所の前の広場にゲンゼリーゼル・ブルンネン（Gänselieselbrunnen）という家鴨をかかえた少女の立像のある泉水があった。グリム兄弟がゲッティンゲンにゆかりがあったから、その記念のためであるとわかった。

広場には泉ありけりその中におとぎの国の乙女見出でつ

噴泉（ブルンネン）は方々の市にあったが、何か心をうるおすものである。泉に水をくみにくるのは女性だから「泉のほとりに女精あり」といっていいかも知れない。サマリヤでも井泉に水をくんでいる女に「水をのませてくれませんか」とたのんだのは誰あろうイエスであった。そのイエスは実は自分が生命の源泉であることをその女に語り、女を驚嘆させた（ヨハネ福音書第４章参照）。

なつかしや「ハルツ」に読みたりしをそぞろあるきぬ

# ●マールブルヒ

三時間ばかりでゲッティンゲンをあとにして、準急（アイル・ツーク）でマールブルヒに向かう。列車は南西に向かって走りつづける。しばらくはヴェーゼル河沿いに、ついでエーデル川沿いに走るながめは実に好かった。ちょっと水郡線や小海線沿線の景色をおもいださせるような景色がしばしば展開して来た。西ドイツのほぼ中部にあたるなごやかなしかも起伏に豊んだ景色、みどりは濃く、流れは清らかに碧く、鉄道がその間をいくつかの弧線を右に左に描きながら走ってゆく。時にはさらさらと葉蔭の音さえ窓べにひびくおもむき、まことに快適なながめであった。

河沿いに弧を描きゆく列車よりあかず眺めし変転の景

マールブルヒへの半途でカッセルという駅についたが、いわゆるザック・バーンホーフ（袋駅）という型で、幾つかの線路が皆ゆきづまりの形で駅に入りこんで、再びそこを発車するときは皆バックすることになる。こういう形の駅がドイツにはなかなか多い。最も大きなのがミュンヘン中央停車場である。

８月７日の夕方、その日の目的地マールブルヒに着いた。異郷の地で友人に迎えられるのは楽しいことである。同僚氷上教授がマールブルヒ大学日本学教授Ａ・ホフマン氏と共にニコニコして迎えてくれた。さっそくホフマン氏のアウト（自動車）にのせられて、マールブルヒの城と塔の見物。城と塔は市の西と東にあるので、両所をたずねることによって市全体の概念を得ることが出来たわけである。いずれも高所にあるから全景を眺め得るし一応説明も承った。大学は学部ごとに建物が市の諸所に散在している。「極端に言えば大学の中に市が散在しているのですよ！」などと氷上兄が笑って言った。ウニヴェルジテーツ・シェタット・マールブルヒ（Universitätsstadt Marburg）ドイツでは大学を中心としている市はみなこのようによばれている。さきのゲッティンゲンもそうである。そしてそれぞれの大学は伝統的な特色と誇りをもっている。日本のように何でも東京に集まってくるのとはちがう。大学の数は少ない。ここの点は大に学ぶべきことである。マ市はなかなか起伏の多い狭い小路の多い趣きのある市である。

学問の歴史を誇る々にドイツのよさをしみじみと知る

その晩泊った宿のおばさんに、戦争のはなしをもちだしたら、身震いしていた。夫や息子や孫を戦争で亡くした婦人はドイツにも沢山いる。中年以上の婦人が目に立つのはそのわけであろう。彼らの中には間貨しをして生計を立てている人がなかなか多い。どうもドイツには笑い顔が少ない感じである。元来まじめな気質の国民だから、なおさら深刻な顔つきになるのだろう。勿論、誰でも笑うときは笑うけれど、全体的印象としてはドイツ人というのは、たやすくは笑わぬといった風潮である。

**８月８日（火）**

# ●聖餐論の古戦場

この日はＨ兄の案内で、城の内部をゆっくり見学。ハイラー教授という宗教学で世界的な教援が収集した東洋の諸宗教の殿堂模型や宗教的祭儀の用具が沢山陳列されているには一驚した。神道のものも勿論あった。いろいろの宗教の用具を比較してみると、神道はやはり、純日本的という印象をこんなところでしみじみと感じた。その清楚さ清純さに私は新たにうたれた。日本人の気質からこの清純さを失ってはならない。私は神道の信徒ではないが、そこにこもる清明清純なる気は貴いと感ずる。ハンブルク大学で素人だけれども「日本精神史」のはなしをするのだが、そのことは改めて感じた。仏教その他比較が相互にできたことが面白かった。

このお城の中に有名な一室がある。それは１５２９年１０月の始めに宗教改革者ルッターとツウィングリが「聖餐論」を戦わした両雄会見の室である。じっとその昔を椅子に腰をおろして偲んでみた。どうもあの場合はルッターの説の方が無理のようだ。ドイツ的な頑固さが彼の主張にあったし、ツウィングリの方が近代的な解釈である。しかしおそらくどちらも中心からずれた。すなわち、イエスが最後の晩餐で、弟子たちにパンをさいてわかち、葡萄酒をついで杯からのませたときにこれは「私の体だ」「これは私の血だ」と申されたのは、どこまでも霊的な意味であって、カトリックのようにパンや葡萄酒がキリストの体に化する「化体」でもなければ、ツウィングリの言ったように贖罪の譬喩的「象徴」でもない。またルッターが強引に主張したように、そこにキリストの血や肉が「合体」するのでもない。そのような魔術的な意味ではなく、パンはパンであり、葡萄酒は葡萄酒でありながら、

「たましいが、同時に霊において私を飲み且つ食うのだよ！」

との意であると私は思う。換言すれば、パンも葡萄酒もこれを食べ且つ飲むことが具体的なことであるように、キリストは、具体的にキリストの霊的な生命を受けよとの意で、弟子に食わせ、飲ませた。この具体的に食べ且つ飲むことを、霊的になせ──、その意味でこの晩餐を記念とせよ、と言われたので、およそイエスの如き霊的人物が、制度的なものを規定したり、そういうことに重点を置いたとは考えられない。教会の聖餐式というものをドイツヘ来てはじめてうけてみた。キリストの霊的生命に同時にあずかるという心がまえと祈りをもってなすなら結構なことだ。問題は真に霊的にキリストを食い且つ飲んでいるかである。式そのものはどうでもいい。問題はいつも霊的生命の具体性にある。宗教は論議にあらず。身証にある！　ルッターもツウィングリも、親鸞の南無阿弥陀仏、日蓮の南無妙法蓮華経の一念にこもる霊性には及ばない。

聖餐をル・ツの二人の諍いし城の室にて吐息つきたり

# ●ホフマン教授

それからドイツ最古のゴチック式教会堂である。エリザベット教会をのぞいてみた。歴史を長くとどめ素朴に神さびて立つ教会堂はいいと思った。いたずらに大きなものは決してよくない。これでもまだ大きすぎると思うくらいだ。大学もプロテスタント大学として最古のものである。Ｈ・アダメック牧師をたずねて、昼食をいただきながらＨ兄と三人でいろいろおはなしをした。私が自分の集会を、聖書の事実に即して幕屋と称していることも話した（『曠愛新書』第２、第３号参照）。それから再びホフマン教授とおちあい、街を歩いた。ホフマンさんが急に薬局（アポテーケ）にすがたをかくした。ちょっとたちどまって待っていた。出て来て何をするかと思ったら、私の上衣のしみをとってあげるいって、チューブ入りの薬をしみに塗りつけ、自分の上衣の袖でこすった。おかげで、私の上衣はきれいにおちた。そしてそのチューブを私のポケットにねじこんで、またよごしても大丈夫ですよ、と冗談をいって笑っていた。私はこの人の親切さに旅心があたためられた。終始ニコニコと語り、時折、冗談をとばす人である。ホフマン教授は独身で、小鳥を愛し、小鳥と暮していると聞き、仙人のような風貌がうなずけた。なかなか日本語がうまいので感心した。お茶を三人でのんだが、汽車の時刻が来たので駅に急いだ。つきぬおもいで、アウフ・ヴィーダーゼーン（さよなら）をした。ドイツ語の「さよなら」は「再びお会いするまで！」という希望の言である。「さよなら」は本来はあきらめの気持だろう。しかし、「さよなら」の奥に無限の希望をふくめてよい。

列車はフランクフルトに向かって走る。時間があったら途中のギーセンから、ウェッツラーに立ちよりたかった。いかにも残念で仕方がない。ゲーテの「ウェルテル」でおなじみのロッテ・ハウスのあるところだからである。むしろ予定はあまり組まない旅の方がよい。「ウェルテル」はドイツ文学で最初に読んだ本、しかも水戸の高校で今は亡き小牧健夫先生から学んだ。あのときの気分はいつまでも忘れられない。あの体験小説の５月１０日のところにゲーテの全生涯を貫く彼の魂の息吹が感ぜられる一くだりがある。私も„das Wehen des Alliebenden”「一切を愛する者の息吹」を体感しつつ生きてゆくであろう。

その昔水戸高校に学びてし「ウェルテル」の里をべに想う

# ●アイテル牧師

午後４時にフランクフルト・アム・マイン（ライン支流「マイン河畔のフランクフルト」）の駅に降り立つ。アイテル牧師が隣接の市オッフェンバッハから出迎えてくださった。勿論お互に初対面だが、あちらは人波のなかから日本人をさがしだすのだし、こちらは牧師さんらしい人はとうかがうわけで、思わず双方の視線が合ったというものだ。どちらも少々意外の顔つきである。あちらはけたちがいに太った人だし、こちらはなみはずれて細い男というわけであったから。牧師さんは自家用車をもっている。日本の牧師さんとはやはり生活水準がちがう。大学教授も同じこと。オッフェンバッハの自宅へ御案内。「今日は私のガスト・フロインド（親しいお客さん）としてお泊り下さい」といって一室を与えてくださった。アイテルさんはよき内助であった奥さんを失ってまだ日が浅いのだと彼を紹介してくれた若き聖書学者高橋三郎君から聞いていたので胸中をお察しした。ケックリッツという中等学校の先生と三人でおそくまで語った。私の信仰体験をはなしてくれというので大分語った。Ｋ氏は感動した面もちであった。そのためか「明日は是非私のところへ来て下さい。そして教会連合の青年集会があるから、そこで一席して下さい」とたのまれた。福音のあかしのためならと思って予定を変更してゆくことにした。

**８月９日（水）**

# ●フラントフルト

午前に辞去してフランクフルトの駅へゆく。遊覧バスが今しがた出たというので、タクシーでそれを追い、ゲーテ・ハウスでつかまえる。ゲーテ・ハウスもかつて戦禍でやられ、建てなおされたもの。記念館といったものは大方そんなことになる。ただ大切なのは中味が本ものであるかどうかということである。ここはゲーテが幼少年時代を暮らしたところで、丁度２百年ほど昔の上流家庭の生活様式がうかがわれるわけである。彼の自伝「詩と真実」のはじめの方を思い出しながら見た。髣髴としてくるものがあった。運命にめぐまれた天才である。彼は自然を愛し、人間と親しんだ。貴族生活そのものは彼に問題でなかった。

それからレーメル（Römer）という建物に入る。そこの階上にカイザー・ザールという豪華な大広間がある。カルル大帝（７６８～８１４）以来、この地方に君臨していた５２名の歴代王者の肖像画が壁の四面に張りめぐされてある。みな王者らしい権力の権化のような顔をしている。ルッターを脅かしそこなったカルル五世もいた（１５１９～１５５６）。しんがりはフランツ二世（１７９２～１８０６）である。この民主的な時代にこういう帝王の顔をみても昔物語の感がするだけである。ただ昔の人たちは権力の奴隷とされて気の毒だったという気持は湧いてくる。しかし国家というものが武力をたのみとして立っている点では今もかわりはない。人間の愚かさと罪性の深さをおもい、末法の世かなとしみじみ思う。

# ●棕櫚の植物園

第二次大戦でひどく爆撃をくらったこの市は大部分新建築である。バスは市のめぬき通りを縫って走る。バス・ガールの説明で淡い印象をのこしつつ。やがてパルメン・ガルテン（棕櫚の植物園）に着く。芝生と花園と噴水の美しさ。

＜Die Blumen sind die Nahrung der Seele＞

「草花はたましいの糧である」とどこかに書いてあった。温室に熱帯植物が沢山繁茂していた。もっとゆっくりながめたかったが、遊覧バスの団体行動のかなしさである。芭蕉の葉蔭に白い裸体！　ギリシャ的なアダムとイヴである。逞ましい男性が女体をかかえて身辺を見おろしている。毒蛇から女を護ろうとしているかの如く。しかしこの立像のいわれをたずねるいとまもなかった。

# ●カンパニアのゲーテ像

遊覧一周が終って、私はひとりで美術館をたずねた。中央階段をのぼって入った広間の正面に、ゲーテの「イタリア紀行」で有名なティシュバイン作の「カンパニアのゲーテ」がいるではないか。これがあの原画かと、その前にすえられたベンチに腰をおろして、じっとゲーテを見つめた。

「眼が太陽のようでないならば

　　　太陽を見ることは決してできないであろう。

　我らのうちに神の本来の力がないならば

　　　どうして神的なものに恍惚たり得るであろう。」

といったこの人の眼！　何と魅力ある画だろう、何と魅力ある人間であろう。純ドイツ的なものには限界がある。実にハッキリした限界がある。そのことは僅か一年の滞在であったがいやというほど感じさせられた。純独乙的なものは実につよい水も洩らさぬ自意識である。意志的な、そして論理的なあるものである。これが仕事を地みちにやりとげてゆく、組織的につみあげてゆく。しかしその我意を貫くつよさが、他国民の反感を買い、ドイツは嫌われる悲劇性をもっているようだ。しかしゲーテは、その独乙的なものをもちながら、美事にこれを乗り越え、そして東西を融合せんとする大きな人間に展開した。ドイツ人がもっとゲーテ的な質になってもらいたいものである。ところがカトリックもプロテスタントも、（ドイツの場合はプロテスタントはルッテーリッシュ・エヴァンゲーリッシュ、「ルッター的福音的」という正統派が多いわけだが）ゲーテには一種の尊敬はもつとしても、きわめて宗派的な考え方がつよいから、ゲーテの大きさを端的に見てこれを消化しようとしない。

神的なもの、大自然、永遠に女性的なもの、この三つのものと心魂が融合しないでは生きていられなかった彼である。それがオーソドックス（正統）信者のつまずきとなるし、ゲーテ讃仰者にも正しくはなかなか理解されていないであろう。およそ狭隘なパリサイ根性とは縁のないこの人にこそ、彼が親友シラーについて「彼には生まれつきキリストに似たものがある」と言った言がもっと深い意味であてはまる。ゲーテの中にはキリストが重んじたいつわりのない童心がつらぬいていたからである。

カンパニアの廃墟に憩うゲーテなりゲーテに憩いて去りがてなりし

万象をじっと見つめて本質をつかみしゲーテのまなざしに見入る

# ●サムソンとデリラ

この美術館でもう一つ私を全く別な角度からひきつけた絵があった。巨匠レンブラントのサムソンである。美女デリラがサムソンをおとしいれて怪力の所在であった頭髪を切りとって逃げてゆく。ペリシテの勇士たちは怪力の失せたサムソンをねじふせて刀剣でサムソンの両眼をえりぬこうとしている洞穴中の劇的瞬間！　レンブラント一流の光と闇の強いコントラスト。まるで画面から鬼気が吹息きかかり、人物が躍り出でんばかりの迫力ある画！（旧約聖書士師記第16章参照）。レンブラントは人間そのものを直視した。写実においてものの本質を描いた。と同時に人間とこの矛盾だらけの人間界を神の光の下で見た。そこに彼の絵の深さと余韻がある。そう私は感ずる。

オランダの巨匠の描きしサムソンの劇的捕縛に息をこらしぬ

この二つの名画を満喫して駅へ急ぐ。待ち合わせのＫ氏とダルムシュタットへの車中の人となる。日が暮れかかる頃彼の自宅につく。夕食後、市の諸教会の青少年連合の集会に出かける。信仰の再燃の必要を語った。そこの牧師もＫ氏も共感して信仰の覚醒を一同に促していた。何しろキリスト教国で教会はいたるところにあり、伝統と習慣で新鮮味が失せるのも無理はない。だから私のような型破りがものを言うと何か今まで眠っていたものが目ざまされる思いのするのも本当だろう。しかし大半は「笛吹けども躍らず」である。

若人の教会連合集会に信仰の証言ぶちまけたりき

**８月１０日（木）**

# ●デイールスベルク古城址

これでダルムシュタットの使命を果たし、翌日（１０日）午前、博物館をのぞいてハイデルベルクに向かった。駅につくと神学の学徒佐竹明君が自家用車で待っていてくれた。彼の世話で有名な「古橋」のたもとの旅館に荷物をおろして、さっそくハイデルベルク市からネッカール河沿いに河上十粁の地点にあるディールスベルク古城址へとドライヴ。山頂城下町の中央に城壁が半円にのこり、そこから橋が一本望楼にかかっている。相当雨露にさらされた木製の橋で、そこをわたるのはあまり気もちのいいものではなかった。その望楼からネッカールの静かな流れとあたりの山陵の起伏を一眺した。すばらしい眺めであった。聞けばこの城の下に深い深い井泉があって籠城のときの宝の水であった由。また敵に包囲されて落城のとき逃れ得た間道があった由。それは未だに発見されていないぬけ路であったという。よくも土竜のように掘ったものだと思う。

半円に夏草をいだく城壁の中に苔むす望楼のありは包字形なり城楼と望楼一つ夏草の中

それから、その井泉を見るために山腹の森の中へ案内された。そこには洞穴の入口があって、入穴料を払うと穴守りがスウィッチをひねってくれる。八十余米の深い穴路に点々と豆電灯がともる。なかば手さぐりのようにして狭い曲りくねった穴路をたどる。まことにうすきみのわるい感じで、ひとりではちょっと入る気のしないものである。穴路のどんづまりは円くきりひらかれて、そこに鉄製の手すりがめぐらされている。のぞいてみると更に二十米の深みに井泉！　はるか上方からの空の光をほんのりと反映していた。上を仰ぐと城の中央の空がかすかに仰がれる。よくも掘ったものである。

十七世紀の半、皇帝軍の将ティリーに攻略されるまで、久しく難攻不落であったこの城の戦史の一端を案内書によみ、千早城の守りを思い起こした。

城山の横穴深くまさぐれば城の真下の真洞の泉

美しき自然の中にも攻防の城跡はあり嗚呼人の世や

# ●ハイデルベルク

再びハイデルにもどり、市の背後の山陵にのぼり、暮色蒼然たるハイデルの市とネッカールをそこに立つ古塔の上からじっと眺めた。水戸高校時代に「アルト・ハイデルベルク」を読んで以来、一種の憧憬の念をもって夢想していたハイデルベルクを目のあたり見て、すずろに感無量であった。

青春の日より久しくあこがれしハイデルベルクの夕景かなし

Ｓ君と夕食をレストーラン・ペルケオ（有名な酒のみの小男の名）でしたためた。その頃からひどく雨が降り出した。にも拘らず夜は市はずれの同じく神学学徒熊沢義宣君をたずねた。そこでＳ君の東独やソ連旅行のスライドをみせてもらった。私は東独方面へゆく機会がないからその幻灯にうち興じた。夜更けて旅館にもどり、ぐっすり寝込んだ。

**８月１１日（金）**

午前は有名なハイデルのお城の見物。十三世紀に創建され、幾世紀の歴史を経るうちに、戦禍や天災のため破壊されては修復、増築といったわけで様式もさまざまである。１６２２年の戦では帝軍の将ティリーに破られたことディールスベルク城と同じ。１７６４年にはものすごい落雷でこわれたというはなし。現今は半ば廃墟半ば記念品等をおさめて立派な城をなしている。最後に地下に降りていった。世界に名だたる酒樽があった。１７５１年につくられた第三番目の大樽はその容積２２万１７２６リットルという途方もない巨大なもの、これには全く驚嘆した。酒樽の上には梯子でのぼれる。そこには見物人の一群が立つほどの露台のような場所ができている。

# ●バード・ウィンプフェンの修道院

お城を辞して博物館と大学をちょっとのぞいて再びＳ君におちあう。アウト（自動車）でネッカール沿いにドライヴをしてくれた。快晴の夏空の下、快適なこのドライヴはいつまでも忘れられない思い出の一つである。ヒルシュホルン（鹿の角）城をはじめ、羊腸たるネッカール沿いに次から次へと古城址が立ちあらわれる。数十粁を走った。河畔ドライヴの興趣はつきない。バード・ウィンプフェンというところについた。そこには修道院がある。案内僧の説明で修道僧の生活の一端がよく偲ばれた。東西の僧院生活を比較したら、そこに共通な精神をつかむことができよう。僧院の岡の上から丘陵と原野をながめ、有名なハイルブロン市をも遠望した。

僧院の小暗き土間に佇めば修道の壁神さびてあり

僧院の中を巡ればいにしえの修道の霊気ひたひたとよす

# ●シュトットガルト市

ここを辞して更にブレッテンまで飛ばしてくれた。ハイデルから結局百粁ほど走破したことになる。若き友Ｓ君のあつい友情に感謝して別れた。シュトットガルトへの車中で美しい夕陽をながめた。

“Schöne Abendsonne!”

「美しい夕陽ですわ！」共感の声を発して夕陽を眺めた人の横顔も美しかった。シュトットガルト駅では改札口のあたりで、ニコニコしながら未知の人が私をみつけて近づいて来た。夏学期（５月から７月の三ヵ月）を私から教わったＧ・ハルトマン君の御両親である。ベンツで自宅まで御案内。「今晩は私のところでガスト・フロインドとしてどうぞ」とて一室が与えられた。ドライヴで夜景も見せて下さった。南ドイツの人たちの気質は概して明るい。特にこの御夫妻は気もちのいい人たちである。春のダンス・コンクールで一等賞を得られた御夫妻である。

**８月１２日（土）**

午前は国立美術館をたずねた。レンブランドの「獄中のパウロ」が印象にのこった。信仰の象徴としてパウロはよく両刃の剣をもたされている（エペソ6･10～17）。レンブランドは両刃の剣をベッドのところに立てかけた、あたかもパウロと剣が同じ姿勢のように。ドッペルゲンガー（）といった具合にどっしりと大きく描かれている。パウロは田舎の古老のような顔、ベッドに腰かけ、右足でスリッパを踏みつけ、ペンを左手にもち、大きな本をひざの上において、右手ではあごひげを抑えて何か霊想中である。獄窓から光かさしてパウロの上半身のバックは後光のようである。

獄中に霊想しつつ筆をとるパウロの背びらに霊光のさす

信仰の使徒をしるして霊刀はの如く並びて立てり

もう一つは大海をバックにして四人の裸女を描いた四十才のピカソの画。＜Quatre femmes＞「四人の婦人」と題してあるだけである。漁婦らしく逞しい肉体である。その姿勢から判断すると、朝と昼とタと夜とを象徴していると思われる。

# ●マールバッハ

Ｈ御夫妻及びその祖母と私と四人でシュトットガルト市内を走って、有名な望遠塔につき、観光客が一度はのぼってみるであろうその塔にのぼった。勿論エレベーターである。東京タワーの物見台とどっちが高いだろう。大した眺望である。しかし真下をのぞくことは禁物だ。目がまわるようだ。午後は北方マールバッハまでドライヴでシラー・ハウスとシラー博物館を観た。詩人の筆跡も勿論あった。やはり肉筆というものは、何かその人間をじかに感じさせるものがある。

貧しかるシラーの生家のゆかしさよ自由の灯火ここにれり

午後の陽も少しく傾きかけたころ、シュトットガルト駅でＨ御夫妻に別れを告げた。旅人をねんごろにあつかう人の心のあたたかさをしみじみと感謝した。

# ●ノイ・ウルムのグンデルト博士

そのタ、シュトットガルトから更に南東方ドナウ河畔のウルムヘと私の乗っているＤツーク（急行列車）はシュウェービッシェ・アルプ山脈を横断して走っていた。カバンの中に幾冊かの独乙語の本と雑誌をもっていたが、その中には内村鑑三先生の英文の名著“How I became a Christian”の独訳“Wie ich ein Christ wurde”があった。それをとり出して訳者の序文を読んでみた。これは二十幾年も前によんだ古本で、序文などは殆んど忘れていたから、大変興味をおぼえた。

その冒頭にこんなことが書いてあった。ある農夫が関西方面からはるばる東京は柏木の内村を訪ねた。はなし会うこと二時間、農夫はこれで目的を達したからいとまごいをするといった。内村はせっかく東京まで来て東京見物をしないで帰るとは、一体何を目的に来たのかと問いかえした。すると農夫は言った。「私はあなたがあなたの書きなさった本そのままの人であることがわかったから、もうこれで用はないのです。私は田の仕事が忙しいから見物などしているひまはありません」と。内村はその率直さに感じたか、強いて一泊させて、翌日西方へ帰らせた。「文は人なり」といわれる通りの内村であることを訳者も内村の近隣に永らく住んでよく知っているから、この農夫の言に同感である。内村は「その心臓で書き、生活で書いている。」だから内村を知らんとする者は彼の著作を読むに如かずである。自分も無駄な序文をこの訳書に書くまい。といった趣旨のことが書いてあった。

序文を読んで冥想しているうちに列車はウルムに着いた。八十路を越える老翁グンデルト博士がステッキをつきながら私を駅まで出迎えて下っているには驚き、且つ感激した。ウィルヘルム・グンデルト先生というのは私が水戸高校（旧制）時代に親しく教えを受けたドイツ語の先生で、その当時水戸高校のドイツ語教授陣には、小牧、相良、実吉、吹田（ＡＢＣ順）の諸先生が居られた。それは今を去る３５、６年前のことである。しかしその当時の印象は実にあざやかなものがある。「よくたずねてくれた」と非常によろこんで下さった。

その八十路を越ゆる師の君が杖を曳きつつ出迎え給う

博士は現在、ドイツにおける日本学の最高権威者であられる。「日本宗教史」や「日本文学史」などの著書があり、日本古典に対する造詣は実に深い。目下「碧巌録」訳解の大業を進めておられる。私のために予約をして下さったホテルに電話をかけて下さったのち、直ちにタクシーで御自宅へ招じ入れて下さった。階上の書斎にのぼり、久方振りのおはなし合いである。何からどう語ったか、判然と思い出すわけにはいかぬが、その内容は大方次のようなものであった。

先生は目下、『碧巌録』の翻訳と註解に従事しておられるので、そのことについておたずねした。先生は勿論、これを原語の発音で読んでおられる。『無門関』は私も読んだので、『碧巌録』（１２２８年完成）との関連について承った。前者は後者におくれること１００年余、しかし、『碧巌録』の本質的なものをよくつかんだエッセンスであるから、『無門関』は素晴らしいものだと言っておられた。先生は第三十七則の条を翻訳中であられた。そのの部分の訳文を朗々よんで下さった。詩的格調豊かなのに感銘した。第三十七則、

三界無法、何処求心

という本則は面白い言である。『碧眼録』の註解をよんでみると、三界とは欲界、色界、無色界のこと。ところで、法は物質界に関わり、心は霊界に関わる。無法といえば、物質界は有にして無と観ぜられる世界。ところが心は無形で而も有ると悟られる世界、その心は何処に求められるか、というので、この盤山禅師の「三界無法、何処求心」の一句に、釈尊の八万四千の法門も道破されているというわけである。

先生をお訪ねしたときに、この第三十七則と取っ組んでおられたことは、まことに不思議な気がしてならない。私がこの句を右の解説など知らずに先生の傍らで拝見したときに、すぐ脳裏にひらめいてきたのは、使徒パウロのローマ人への手紙の第８章２節の言である。すなわち、「キリスト・イエスにある生命の霊の法」という言である。仏教が因縁所生の法に物心一如の在り方をみるとすれば、キリスト教は神意霊法が万象を貫くとみている。

ハンブルク大学で日本語の会話、訳読を担当するかたわら、秋からは日本精神史の一端を講じてみたいと思っていたので、グンデルト先生の著書“Japanische Religionsgeschichte”を同僚の田中教授から拝借して一参考資料として読んでもいたし、かねてから宗教に対する関心から、仏教関係の本もかじっていたので、大分宗教諭に花が咲いた。

聖徳太子から始まる仏教界の高僧の次元が、旧約の預言者に始まり使徒たちを中心とするキリスト教界の大物と、霊的次元において相似なものがあること、そしてそのような霊的次元がのみこめてくると、聖書を読むにしても、仏典を繙くにしても、それぞれの光明の照応、次元の交流となって相益すること。今の一般のキリスト教も仏教も、このような霊的次元から著しく、ずれを来たし、質的低下を来たしていて、所謂研究は微に入り、細を穿っても、観念的な把握の域を脱せず、観念的には正しくても、実は奥義をつかみ得ないでいること。こういった感想に対して先生は全く同感の意を表され、イザヤ書第５５章の

「わが思念は汝らの思念と異なり、わが道は汝らの道と異なる」

という実存神（ヤハウェー）の言を引用して、神は今の一般のキリスト教界に対してもそういわれるであろうと、言われた。

その一つの理由として、こんなことを言われた。欧米人の言語が、余りにも人称の区別がハッキリしていて、そういう自意識の強いことが、ややもすると対立の世界から融合一如的な世界に入りにくい一因をなしている。だから深く生命の交流、一体の相に入りがたい。ところが聖書は深い一体の世界をもっている。それをもたなかったら、いくら研究しても徒らである。無意味である、と。

私もこれに和して、梵鐘について、かって除夜の鐘を聴きながら冥想したことをお話した。すなわち、西洋の鐘にはベルがあるが、梵鐘の腹は空である無である。しかし、それは虚無的ではなく、天空が充満しているし、また鐘は天から吊されてあり、しかも天空に抱かれている。その相は、言わば絶対空間における不動の態勢で、立場、主義、主張といった主観的なものをもたず、しかも天と鐘とは一如一体の相においてある。すなわち撞木で衝けば、鳴るは天か鐘か。あのゴーンという妙音は天鐘一如のひびきである。その点で東洋の梵鐘こそ宗教的な深い心境をあらわして幽玄であることを、お話ししたら、先生は全く同感感銘して下さった。普通のドイツ人だったら、こんな気持はそう容易には受けとめてくれないであろう。ところがイエスは正にその心境で

「父と我とは一つなり」

との大告白をなしている。イエスは正に神のふところに坐っていたような霊的人物であった。今や日本のキリスト教界は、欧米神学の殼を破って、百尺竿頭一歩を進めるべきである。そうしたら十方世界に身を躍らせる態の霊的な独立自由を得て、日本人らしい角度から、真に福音を展開できるであろう。むしろスイスのブルンナー博士が、神学者として、彼の最近の名著『ドグマティーク』第三巻で、従来の欧米神学が聖書における霊（ガイスト）の本当の把握からずれていることを指摘しておられる。グンデルト博士が、東洋学の泰斗として、『碧巌録』の訳註を晩年の大業として企てておられるのも、そのような西欧神学の欠陥に対する一種のプロテストと見て可いのであろう。

ドイツ人は「ヤー」と「ナイン」がハッキリしている。そのことは勿論結構なことだが、それが自意識過剰であったり、主我的であったりする傾向が強いとすれば、没我的に無私的になり難い欠陥となる。日本人が、ものごとをひかえ目に言い、相手の心境を思いやるという長所があるとすれば、そして人称代名詞の省略もしばしばそういう気持と連関しているとすれば、心と心、霊と霊の融合、一如の境地を会得しやすいわけであろう。問題はもっとそれを積極的に、単に感情的にではなく、全実存的に進めるか否かにあるけれども。ともあれ、グンデルト博士が、一面フィロローグ（言語学者）として、人称代名詞の用い方の意識面に着目して、宗教との連関を説かれたのは興味あることであった。

ルッターの宗教改革は、勿論自由の大道を提唱したものであったが、霊的な深さを追求する面になお限界をとどめていた。その点でむしろピエテイステン（敬虔派）が、使徒パウロ、使徒ヨハネにおける神秘面の把握を継いだと思われる。そのことをＧ博士も強調しておられ、ベンゲルの聖書註解の深さツィンツェンドルフやテルシュテーゲン等の讃美歌の霊的なゲミュート（心情）を称揚しておられた。

宗教のことは、とかく研究に偏したり、御利益に堕したりするものであるが、本質を把握し、中道を身につけ、健全な文化の底力となる態のものでありたい。深い内面性と自由な活現の宗教的生命が非常に欠如してしまったことは二十世紀の人類共通の欠陥であろう。ドイツを去るすこし前、この年の早春、私はハンブルクの教会新聞に「聖霊のバプテスマ」と題して一文を寄稿した。周知の如くルッターはカトリックの七つの秘蹟中から、洗礼と聖餐だけをとりのこしておいたが、この二つも一般に形骸化しているので、内村鑑三は更に一歩をすすめて全廃し、「信仰のみ」＜Sola fide＞に徹し、所謂「無教会主義」がそこに出現したわけであった。しかし「信仰のみ」というその信仰が果して真に聖書的であるかはつねに新たに問われねばならぬ問題で、イエスにおいても使徒たちにおいても聖霊のバプテスマが夫々の意味において決定的な事態であったことが今のキリスト教界に真剣に自分の問題とされていないから、私はそのことを告白せざるを得ないわけであった。日本仏教の偉大な僧たちは、ほとけの世界でそのような次元に生きていたればこそ、あのような驚くべき宗教的実存を体現したのであった。

南無といえば阿弥陀来にけり一つ身をわれとや言わん仏とや言わん

という道歌の境地こそ聖霊内住の心境と相照応するところのものである。

主の中に生くるの乏しかるキリスト界を師も嘆きたり

やがて食事時となった。小柄ながらまことに健康に見うけられる博士夫人が、遠来の私のため特に日本的なうどんや海苔や大根おろしなどをタ餐の食卓に備えてくださった。博士が食前の祈りをしずかにして下さった。それはあの敬虔派で讃美歌作者として有名なテルシュテーゲンの歌の一節であった。讃美歌をそのまま自分の祈りとしておられる博士の心境を床しく思った。

食前の祈りの言は慕わしきテルシュテーゲンの讃美なりけり

その室にかかげられてある肖像をおたずねしたら、先生の祖父、祖母とわかり、祖父は言語学者で教師で、インドヘ宣教にゆかれ、そこで２３年伝道に従事され、インド西南部のマラヤラム語に聖書を訳され、その辞典も作られた由、祖母の名は「ユリア」といって、祖父は言語学者（フィロローグ）であるので、祖父は冗談まじりに、「使徒パウロがローマ書16･15で『フィロログスとユリアによろしく』と書いているのは、私たち二人に言っているのだよ」などと言ったりしました、となつかしそうにおじいさんのことを語られた。そして「祖父は、聖書の言を、イエスが言われたように、食べていました」と語られた。博士はこのおじいさんから、少年のときにサンスクリットを自然に学びおぼえたので、自分も将来、インドで伝道をしたい志であったが、インドの気候風土が自分の健康に無理だと医師にいわれて、日本へ行きました、と言われた。先生のお孫女が語学の才能豊かな女性であるのも偶然でない。隔世三代の非常に精神的な言語学者というわけであろう。

はなしは転じて日本のこととなり、かって在住された新潟のことも出て来たが、私の顔が信州越後方面の産だと推測されたのには一驚した。私の父は佐渡であり、母は信州松代であるからである。手島郁郎氏から贈られた石川靖峯作の雲仙焼名茶碗を感激してよろこんでおられた。先生は何といっても御老体であるから、生活を専ら碧巌録に集注して無駄な時間つぶしはなさらない。わたしのために貴重な時間をかくも割いて下さったことを心から感謝した次第である。

夜の十時になったので、あまり長座をしてはとおいとまごいをすると、またステッキを取って、私のため予約しておいたホテルまで案内するとて同道して下さる。固辞しても容れられないので御好意に廿んじた。